

国立国語研究所学術情報リポジトリ

性差か力 (power) の差か：
初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式
の分析より

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇佐美, まゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/3597

性差か力(power)の差か — 初対面二者間の 会話における話題導入の頻度と形式の分析より—

宇佐美 まゆみ

1 はじめに

「言語と性」に関する研究が新しい局面を迎えている。欧米では、Lakoffの“Language and Women's Place”(1975)を発端に、1970年代以降、言語と性の問題に取り組んだ研究が飛躍的に増大し、その立場、理論、方法論も多岐に渡り、変遷を重ねてきた。日本においても、寿岳章子の『日本語と女』(1979)を始めとして、1970年代後半から1980年代にかけて言語と性の問題を考える研究・活動が活発化していった(井出、1979; 『ことば』(現代日本語研究会)の創刊(1980)等)。しかし、種々のデータの記述が蓄積されてきた一方で、その解釈や立場も多岐に渡ってきた現状を踏まえて、1980年代後半からは、これからの「言語と性」に関する研究のさらなる発展のために、その進むべき方向の模索が行われるようになった。

Todd & Fisher (1988)は、談話(discourse)と性に関する研究の特集としてまとめられた本の序章で、これからの談話研究は、社会構造(social structure)、社会的相互作用(social interaction)、社会的に形成された自己(socially constructed selves)とのかかわりの中で考察されていくべきであるとしている。すなわち、談話研究の中で性の要因の影響を探求していくには、いかなる社会構造の中で、どのような社会的相互作用を通じて社会的な自己が形成されていくのか、また自己形成の過程において「性」の要因がいかなる影響を及ぼしているのかを明らかにしていく必要があるということである。

Todd & Fisher (1988)は、言語と性の問題をそういう観点から捉えていくためには、ある言語行動が生じるコンテキストを重要視し、コンテキストを静的なものとして捉えるのではなく、そのコンテキストに関連する諸要素

(人物、場面等)が生み出す動的なものとして捉える必要があることを強調している。そして、その動的なコンテキストを的確に捉えるためには、そのコンテキストに働く“power(力関係)”を把握する必要があると主張している。

ここで言う“power”とは、日本語で言う「権力」「勢力」等々といったような社会的に規定されるような概念ではなく、ある特定の場面(コンテキスト)ごとに規定されるもので、そのコンテキストに関わる人々や状況の相互作用が生み出した動的で相対的なものを指す。この“power”の概念は、Foucault(1972)の“power”の概念に通ずるところも多く、言語行動に関係したものとしては、後述のBrown & Levinson(1987)の“politeness theory”において扱われている“power”の概念と同様のものと捉えてよいだろう。すなわち、医者や弁護士などという漠然とした社会的地位・役割のみからは、“power”は規定されない。医者が弁護士に自分の経済状態について相談に行くというコンテキストにおいては、弁護士の“power”が上と捉え、弁護士が病気になって医者に行くというコンテキストにおいては、医者の“power”が上というふうに相対的に捉えるのである。

このような、コンテキストに応じた相対的な“power”の概念と比べると、これまでの言語と性に関する研究には、観察者・分析者の主観で、様々な現象を「静的な」要因として捉えてしまっているものが多かった。ある言語行動を分析する際、先に「性」というカテゴリーで切りとってしまい、その後からそれぞれのカテゴリーに、男らしさ・女らしさの典型像を与えるといったような二元論的視点に基づいたものである。しかし、以上に述べたような動的な“power”の概念を導入して現象を再考してみると、従来、性の要因の影響として捉えられていた現象も、「力(power)」「(以下同様)の要因の影響として再解釈できるものが多いのではないかという指摘がなされるようになってきた(遠藤、1994)。

例えば、会話における割り込みは女性より男性の方に多いとか(Zimmerman & West, 1975)、女性の方があいづちが多い(Fishman, 1978; 井出、1982)

などという報告は多いが、性以外の要因、例えば、年齢、社会的地位、話題についての知識、情報量などを同等にした上で、性の要因の影響を探るように、複雑に絡み合う社会的諸要因を統制することによって、どの要因が主に作用しているのかということを厳密に検討した研究はほとんどなされてこなかったといっても過言ではない。

その中で、最近、心理学者が行った要因を統制した研究(内田、1993)は、割り込みは、(少なくとも日本文化の中では)目下の相手に対してのみ生じたという結果を報告し、話者は相手の性よりも、相手の社会的地位や年齢によって話し方を変えていると結論づけている。但し、この研究結果は、テレビのインタビュー番組の分析に基づくものであり、例えば親しい友達同士の会話における割り込み行動の解釈に無条件で適用できるとは限らない。しかし、要は、まずは様々な言語行動をコンテキストごとに異なる相対的なものとして捉えていくことから始めるしかないのである。先にあげたTodd & Fisher(1988)も、この点を繰り返し強調している。

すなわち、言語と性の問題を考える際には、男一女という二元論的視点のみに基づいて早急に全てを統一的に説明する理論を確立することに力を注ぐのではなく、コンテキストを動的に捉えた上で、ある特定のコンテキストの中で、性の要因が話者の言語行動にいかに関与しているかという、いかに(“how”)という機能面を重視した堅実な研究を積み重ねていくことが今後の課題であるといえよう。

本研究は、以上のような認識に基づいた上で、特定のコンテキストとして「初対面の二者間の会話」を取り上げ、その他の社会的要因を統制して、対話相手の年齢・社会的地位の要因と性の要因の二要因に絞り、それらが話者の話題導入の頻度や形式にいかに関与しているかを検討した。

従来より、話題を導入していくことは、その会話の進行権を握ることであり、男女混合の会話の場合、その役割を担っているのは主に男性であるという報告がなされているが(Thorne & Henley, 1975; 江原・山崎・好井、1984等)、日本文化において重要視されている年齢・社会的地位の要因も加

味し、例えば、目上にあたる女性と目下にあたる男性が会話した場合も、従来報告されているような結果と同様の傾向が見られるのかどうかということが検証できるように実験を計画した。

2 方法

2-1 実験計画

Brown and Levinson(1987)の“Politeness theory”²⁾では、“linguistic politeness”は、①話し手(speaker)と聞き手(hearer)の社会的距離(social distance) ②聞き手(hearer)の話し手(speaker)に対する力(power) ③相手にかける負担の度合い(ranking of impositions)の3要因によって規定されるとしている。本研究では、初対面の二者間の会話とすることによって、話者間の①「社会的距離」を一定とみなし、また、学生生活・海外生活という無難な話題で話してもらうことによって、③「相手にかける負担の度合い」を一定(千円借りる際と一千万円借りる際ほどの差がない)と仮定した上で、②の「聞き手の話し手に対する力(power)」及び、性の要因がベースの被験者の言語行動にいかなる影響を及ぼすかを検討した。その際、初対面同士で、同じ会社内での職階の上下のような明確な上下がない場合は、日本文化においては、年齢、或いは、社会的地位が上の者が“power”が上になると仮定した。

以上を検討するため、男女各1名ずつのベースとなる被験者と、同性の「目上・同等・目下」、異性の「目上・同等・目下」に当たる6人の相手との約30分間の会話、合計12会話を計画し、うち有効データである11会話を分析した。被験者と対話相手との組み合わせは、以下の表1の通りである。

表1 対話相手の組み合わせ

ベースの被験者	対話者 仮名：地 位：年齢：性：関係	会話No.
北原 35歳 f 大学院生	湯谷：大学教官：55：f 目上	1
	河井：大学院生：38：f 同等	2
	赤塚：大学院生：28：f 目下	3
	高木：大学教官：39：m 目上	4
	生田：大学院生：39：m 同等	5
	滝川：大学院生：27：m 目下	6
生田 39歳 m 大学院生	田中：大学教官：50：f 目上	7
	北原：大学院生：35：f 同等	8
	赤塚：大学院生：28：f 目下	9
	高木：大学教官：39：m 目上	10
	池内：大学院生：？：m 目下	11

注) ・同姓は同一被験者を表す。
 ・男性同等同士の会話は、被験者の都合により採取できなかった。
 ・本研究では、実際の年齢よりも、被験者が各々の対話相手を「目上・同等・目下」のいずれと捉えるかが重要であるので、それぞれ該当する被験者を実験者が割り当てたが、それが被験者に実際にどう捉えられていたかは、後のアンケートで確認している。

2-2 実験手続き³⁾

男女各一名ずつのベースの被験者に対して、それぞれ同性と異性の「目上」「同等」「目下」にあたると思われる相手を実験者が選び、二人の組で約30分ずつ、実験者不在の状況で会話を行ってもらった。初対面の二者間の会話として最も自然に近い形になるよう、実験者が二人を引き合わせるまで、互いの名前、年齢等を知らせず、自己紹介の段階から録音してもらうようにした。また、状況要因をある程度統制するためと、話のきっかけが作りやすいよう「大学生活・海外生活」という話題で話し始めるよう指示したが、話題の展開、変更は自然にまかせ、与えられた話題に固執する必要はないと指示した。約30分経過後は、突然録音を停止するのではなく、会話を終わるということが分かるように、それとなく締めくくよう指示した。また、会話終

了後、アンケートとインタビューの両方によって、実験者が「目上」「同等」「目下」にあると判断して割り当てた相手同士が、互いにそのように相手を捉えていたかを確認した。また、自然会話データとしてのデータの妥当性の確認のため、どのくらい自然に話せたと思うか、対話者が初対面の相手として話しやすかったかどうか等も、5段階評価で評定してもらった。

2-3 分析方法

以上の方法で得られた会話のうち、初対面の相手との会話の特徴が最も出やすい冒頭の3分間を文字化し、話題導入の頻度と形式について分析した。上記の会話を文字起こししたものを、一発話⁴⁾ごとに、次の3つのカテゴリーによって分類し、コード化した。

- 1) 話題導入-話題導入か (INT : Initiation) か導入以外 (NON : Non initiation) かに分類。
- 2) 各発話の種類を以下の6種類に分類。①質問形式 (Q : Question)、②叙述形式 (ST : Statement)、③確認 (CO : Confirmation)、④質問に対する答え (ANS : Answer)、⑤あいづち (B : Backchannel)、⑥発話埋め合わせ (F : Filler)。
- 3) 各発話が最後まで言い切られているか、そうでない中途終了型発話 (INC : Incomplete) になっているかどうか。

以上の分類に従ってコード化したものを「桐」に入力し、おのおのの頻度を数えた。発話のコード化の信頼性については、筆者ともう一名の二名で検討・確認した⁵⁾。

3 結果と考察

3-1 話題導入の頻度と割合

本項では、主に「話題導入の頻度と割合」に焦点を当てる。まず、話題導入の頻度と割合と、それが質問形式か叙述形式かを表したものを以下の表2にまとめる。

表2 話題導入の頻度と割合

会話 No.	発 話 者	話題導入の頻度			会話 No.	発 話 者	話題導入の頻度				
		Q		ST			計(%)	Q		ST	計(%)
		OQ	CQ					OQ	CQ		
1 同性 目上	北原 湯谷	0 3	0 3	1 0	7 異性 目上	生田 田中	1 0	3 1	1 0	5(83.3) 1(16.7)	
	計 (%)	6 (85.7)	1 (14.3)	7 (100.0)		計 (%)	5 (83.3)	1 16.7	6 (100.0)		
2 同性 同等	北原 河井	0 2	3 0	0 0	8 異性 同等	生田 北原	0 2	2 1	1 1	3(42.9) 4(57.1)	
	計 (%)	5 (100.0)	0 0.0	5 (100.0)		計 (%)	5 (71.4)	2 28.6	7 (100.0)		
3 同性 目下	北原 赤塚	5 2	2 0	1 0	9 異性 目下	生田 赤塚	2 1	1 0	4 0	7(87.5) 1(12.5)	
	計 (%)	9 (90.0)	1 10.0	10 (100.0)		計 (%)	4 (50.0)	4 50.0	8 (100.0)		
4 異性 目上	北原 高木	0 3	1 0	1 1	10 同性 目上	生田 高木	1 3	1 1	1 0	3(42.9) 4(57.1)	
	計 (%)	4 (66.7)	2 33.3	6 (100.0)		計 (%)	6 (58.7)	1 14.3	7 (100.0)		
5 異性 同等	北原 生田	2 0	1 2	1 1	11 同性 目下	生田 池内	3 0	1 0	0 0	4(100.0) 0(0.0)	
	計 (%)	5 (71.4)	2 28.6	7 (100.0)		計 (%)	4 (100.0)	0 0.0	4 (100.0)		
6 異性 目下	北原 滝川	2 0	0 1	2 0							
	計 (%)	3 (60.0)	2 40.0	5 (100.0)							

(Q:Question OQ:Open Question CQ:Closed Question ST:Statement)

表2を見ると、全体的な傾向として、対話者の性には関係なく、目上にあたる者が話題を導入する頻度が高く、同僚同士の会話においては、話題導入の頻度もほぼ同じになっていることが分かる。ベースの被験者を基準にしてみると、対話者の年齢・社会的地位が下がるにつれ、話題導入の頻度が高くなるという傾向を示している。初対面の女性同士の会話において、目上にあたる話者が話題を導入する頻度が高いことは、既に、宇佐美(1993 a, b)でも報告されている。また、小林(1993)も、S家とN家の女性の家族の「座談」の分析を行い、両家とも最年長者の話題提起の割合が高く、次世代は発話は多いが話題提起を行わず、最年少者は発話数も少なく話題提起も行わなかったと報告している。

表2の結果は、男性同士の会話でも、目上の話者の話題導入頻度が高いことを示しており、年齢・社会的地位が話題導入の頻度に顕著に反映されることを支持している。年齢や社会的地位が高い者が、話題を導入していくことによって会話の進行権を握っているということは、職階が上の者の話題導入の頻度が高いというNakane(1970)の指摘や、英語を分析した研究(Coser, 1960; Goffman, 1972)においても報告されている。

しかし、本研究の目的は、そこに性の要因が絡んできたときに、どうなるかを検討するということでもあった。本研究の会話組み合わせで女性が男性の目上にあたるのは、会話6と7の二つであるが、結果は二つに分かれた。すなわち、会話6では、目上の女性である北原の話題導入の頻度が、目下の男性の滝川より高くなっているが、会話7では、目下の男性である生田の話題導入頻度の方が、目上の女性である田中より高くなっている。先に述べた、目上の話者の話題導入頻度が高いという本研究結果の全体的傾向から考えると、唯一の例外となっているのが、この会話7である。

これには「世代」の違いという要因が絡んでいるのではないと思われる。会話6の目上の女性北原は35歳、男性の滝川は27歳であるのに対して、会話7で目上の女性にあたる田中は調査当時50歳で、戦中生まれである。個人的特性もあろうが、いわゆる「伝統的」なタイプの女性であり、控えめで発言

も少なかった。そのため、目下の男性にあたる39歳の生田は、自分に優位に会話を進めるためというよりは、むしろ相手に気を使って話題を出しているという感があった。

生田が田中に気を使っていることは、生田の話題導入の発話の60%が、躊躇しながら話す、「田中先生は客員教授で・・・?」「そうすると、普段は、この辺じゃなくて、えー、どちらにいらっしゃる・・・?」などのように、発話を和らげる機能があると考えられる中途終了型発話になっていることから窺えた。(中途終了型発話については、次の「話題導入の形式」の項で詳しく検討する。)また、会話録音後のフォローアップアンケートでも、「相手と話しやすかったかどうか」という質問に、生田はふつうと答えているのに対して、田中は非常に話しやすかったと答えていることも、生田が気を使っていたことを示していると思われる。

以上を総合的に考察すると、戦後の日本の高等教育を受けた人々の会話における話題導入頻度には、年齢・社会的地位といった要因が、性の要因に優先して反映されるという一つの仮説を立てることができるのではないかとと思われる。会話7の田中が該当するが、現在50歳を超える世代にこの仮説が当てはまるか否かには、再検討の余地があろう。今後、年齢・社会的地位を統制した男女混合の会話のさらなる分析が望まれるところである。

3-2 話題導入の形式

本項では、話題導入の形式に焦点をあて、それが、対話相手によって変わってくるのか否かを検討する。まず、全体的には初対面の会話ということもあって、話題導入の形式は、自己紹介の際の叙述形式以外は、相手の情報を引き出すための質問形式となっており、これが全体の78.6%を占めていた。先の話導入の頻度の分析の際、目上の話者が話題を導入する頻度が高いという全体的傾向の唯一の例外であった会話7では、目下にあたる男性の方が話題導入の頻度が高かったという結果を示した。その際、その目下の話者の発話に「中途終了型発話」が多かったことを記し、これは、中途終了型発話

には、発話を緩和する機能があるためではないかと解釈した。もし、そうであるとすると、本研究の実験計画においては、全体的には、目上の相手に対して中途終了型発話が多くなることが予想される。このことを検証するため、次の表3に、ベースの話者の各会話ごとの全発話数に占める中途終了型発話の割合を示した。

表3 ベースの被験者の全発話に占める中途終了型発話の割合

ベース	対話者	中途終了型発話の割合 (%)	ベース	対話者	中途終了型発話の割合 (%)
北原 f	湯谷 f(目上)	38.9	生田 m	田中 f(目上)	27.9
	河合 f(同等)	17.9		北原 f(同等)	27.9
	赤塚 f(目下)	33.3		赤塚 f(目下)	20.3
	高木 m(目上)	55.6		高木 m(目上)	29.0
	生田 m(同等)	17.9		/ (同等)	/
	滝川 m(目下)	25.8		池内 m(目下)	18.9
	平均	31.6		平均	24.8

表3を見ると、女性のベース北原の場合は、中途終了型発話は、全体的には、対目上→目下→同等の順に多く、特に目上の男性に対して多くなっている。男性のベース生田の場合、欠けているデータがあるためなんとも言えない。しかし、中途終了型発話が対目上、目下、同等の順に多いことは、前にも報告されている(生駒・志村、1993)。このことから、一つの仮説として、中途終了型発話は、心的距離の大きい相手に話しかける際や、相手にかかる負担の度合いが大きい際、すなわち、Brown & Levinsonの“politeness theory”で言う、FTA (Face Threatening Acts) の度合いが高い時に、発話を緩和するための politeness strategy の一つとして用いられるのではないかと考えられる。

3-1の結果を基に、日本文化においては、初対面の会話では、目上の人が話題を導入するということが暗黙の了解のごとくになっていると仮定すると、それに反する言語行動を行うこと、すなわち、目下が話題を導入するこ

とは、Brown & Levinson の “politeness theory” で言う FTA の度合い(相手を脅かす度合い)が高いということになる。そのため、それを緩和する、よりpoliteな言語行動が期待されることになる。日本語の場合、初対面の会話ということで、既に、言語形式としては、皆大差なく丁寧体、敬語が使われているため、よりpoliteになるためには、他の何らかのストラテジーが用いられねばならないことになる。その一つとして、中途終了型発話の使用があるのではないかという仮説が立てられる。

目下の方から話題を導入することが、FTAの度合いが高いとすれば、また、中途終了型発話が、politenessストラテジーの一つであるという仮定に基づく、FTAの高い、目下の話者の方から話題を導入する際の中途終了型発話の割合は、目上の話者や同等の会話のうち的一方が話題を導入する時よりも、また、表3で見た話題導入以外の発話も含む、ベースの被験者の全発話に占める中途終了型発話の割合の平均値よりも高くなることが予想できる。そのことを検証するために、次に、すべての被験者の話題を導入する発話に占める中途終了型発話の数と割合を、対話相手が目上、同等、目下である場合ごとにまとめてみた。

表4 話題を導入する発話に占める中途終了型発話の頻度と割合

対話相手	話題導入の頻度	中途終了型発話の数	中途終了型発話の割合(%)
対目下	38	8	21.1
対同等	19*	7	36.8
対目上	15	8	53.3

*男性の同等同士の会話が収集できなかったため、他の2条件より1会話少ない中での絶対数である。

以上の表4からも明らかなように、話題を導入する発話に占める中途終了型発話の割合は、対目上に対して最も多く、ついで対同等、対目下の順になっている。目上に対して話題を導入する際は、予想通り、表3に示したベ-

スの被験者の全発話に占める中途終了型発話の割合の平均値よりも、中途終了型発話の割合が高くなっている。

表4からも分かるように、そもそも、目下にあたる話者が話題を導入する頻度が少ないため(延べ人数8名のうち、話題導入頻度が0回-1名、1回-3名、2回-2名、3回-1名、5回-1名)、平均すると、個々のケースの特徴が相殺されてしまう可能性もある。そこで、以下の表5に、ベースの被験者の結果のみをまとめてみる。

表5 ベースの被験者の目上の相手に対する話題導入に占める中途終了型発話の割合

会話番号	ベースの被験者	対話者(目上)	話題導入頻度	中途終了型発話数	中途終了型発話の割合(%)
1	北原 f	湯谷 f	1	0	0
4	北原 f	高木 m	2	2	100
7	生田 m	田中 f	5	3	60
10	生田 m	高木 m	3	2	66.7

表5を見ると、女性のベースの北原が、目上の女性湯谷に対しては、自己紹介の1回しか話題を導入していないので、かえって中途終了型発話の割合は0%となっているが、その他を見ると、男女のベース共、目上に対して話題を導入する際の中途終了型発話の割合は、表3に示した、目上に対する全発話に占める中途終了型発話の平均値よりもさらに高くなっていることが分かる。このことは、目下が話題を導入することが、FTAの度合いの高い行為であることと、それを緩和するためのストラテジーの一つとして、中途終了型発話が用いられているのではないかという予測を裏付けているといえよう。

また、表3の全発話に占める中途終了型発話の割合は、対目上→目下→同等の順に高く、表4の話題を導入する発話においては、対目上→同等→目下の順に中途終了型発話の割合が高いという結果は、一つの会話を全体的に見ると、「心的距離」の大きい順に、発話を緩和するストラテジーが多く用いられているが(対目上→目下→同等)、「話題を導入する」という言語行動

に絞って見ると、「力(power)」の要因が優先され、対目上→同等→目下の順に、発話を緩和するストラテジーが多く用いられるということを示している。すなわち、言語行動には、心的距離が優先して反映されるものもあれば、powerの要因が優先して反映されるものもあるということである。このことは、Brown & Levinsonの“politeness theory”の3要因のうちどの要因が優先して反映されるかは、それぞれの言語行動によって異なるということを示唆しており、大変興味深い結果である。今後、複雑に絡み合う諸要因の影響をときほぐしていく際の一つの切り口としたい。

4 おわりに

従来の研究では、複雑に絡み合う社会的諸要因を統制した研究が少なく、性の要因とpowerの要因を混同して論じているものが多かった。そこで、本研究では、日本文化においては、年齢・社会的地位が、Brown & Levinsonの“politeness theory”におけるpowerの要因の指標となると仮定し、これらpowerの要因と性の要因を区別し、どちらが初対面の二者間の会話における話題導入の頻度や形式に強く影響を与えているのかが検討できるように、他の社会的要因を統制した実験を行った。

その結果、話題導入は、全体的には性に関係なく目上の話者が多く行うということから、話題導入の頻度には、性の要因よりも、powerの要因(年齢・社会的地位)の方が顕著に反映されることを示し、性の要因は、powerの要因と必ずしも同義ではないことを明らかにした。つまり、戦後の教育を受けた男女混合の会話においては、性の要因として「男性」の方が話題の導入頻度が高いというよりも、「powerが上の者」、すなわち、性に関係なく、年齢・社会的地位が高い方が、話題を導入する頻度が高いと予想できるということである。

また、話題導入の形式については、初対面の会話であることから質問形式が多いことと、目下の者が話題を導入する際には、中途終了型発話を用いる率が高くなることが明らかになった。

また、話題導入の仕方やその展開を質的に分析すると、目上の話者は、話題の導入を頻繁に行って会話をリードしながらも、質問を発することによって相手にターンを譲ったり、あいづちを頻繁に入れたりして、相手が話を続けやすいように配慮するという傾向が見られた。これらの結果を考えると、年齢や社会的地位が反映された会話の運びは、一般的な意味での“power”ということばかりからイメージされるような、力による強制や押しつけを反映しているというよりも、むしろ、日本文化において共有されている目上、目下の「役割意識」を反映していると捉えられるのではないだろうか。

Brown & Levinsonの理論には、性の要因は特に組み込まれていない。しかし、本研究結果の興味深い点は、結果の項では触れられなかったが、女性が目上や同等に当たる場合は、性の要因よりも年齢・社会的地位の要因が優先して会話の運びに反映され、性の要因とpowerの要因とが必ずしも同じではないことを示しながらも、男性が目下の女性と会話をするというように、男性がpower要因で優位に立った際の女性に対する話し方には、従来から男性の特徴として報告されていたような、自己中心的なスタイルが現れていたということである。また、スピーチレベルのシフトに焦点を当てた宇佐美(印刷中)は、初対面の会話においては、女性は、相手が男性の場合、相手の年齢・社会的地位に関わらず、敬語の使用から不使用へのスピーチレベルのシフトをほとんど行わないという結果を報告しており、対話相手の性の要因が年齢・社会的地位の要因に優先して反映される言語行動もあることを示唆している。これらのことを考慮すると、Brown & Levinsonの“politeness theory”に関しては、今後は、この理論が性の要因をどのように扱っていくのかということ、吟味していく必要があると言えよう。

<注>

- 1) 当初は「年齢」の要因のみに絞っていたのだが、現実的な都合で、会話10では、大学院生のベースの被験者の目上の相手として、年齢は同じだが、大学教員であるという被験者にしか協力が得られなかったので、

「年齢・社会的地位」の要因とすることにした。

- 2) “Politeness”を「丁寧さ」と訳さない理由とこの理論の概観については、宇佐美(1993c, 1994)を参照されたい。
- 3) 研究対象・被験者の数等は異なるが、実験手続きは、宇佐美(1993 a, 1993 b)と同様である。重なる部分もあるが、本稿の展開上必要と思われる部分は、改めて記したことをお断りしておく。
- 4) 途中にあいづちが入っても、まだ同じ内容の文が続いていれば、そこで発話が終わったとは考えない。あるまとまりをもった発話を1発話として数えた。
- 5) 文字起こし資料の整理、発話のコード化、信頼性の確認には、昭和女子大学研究助手の嶺田明美氏の協力を得た。この場を借りて感謝の意を表したい。

<引用文献>

=日本語文献=

- 生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー:「断り」という発話行為について」『日本語教育』79号:41-52.
- 井出祥子(1979)『女のことば、男のことば』日本経済通信社
- 井出祥子(1982)「言語と性差」『言語』Vol. 11, No.10, 40-48.
- 宇佐美まゆみ(1993 a)「初対面二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー:話者間の力関係による相違-日本語の場合」『ヒューマン・コミュニケーション研究』第21号:25-40. 日本コミュニケーション学会
- 宇佐美まゆみ(1993 b)「初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析:対話相手に応じた使い分けという観点から」『学苑』第674号:37-47. 昭和女子大学近代文化研究所
- 宇佐美まゆみ(1993 c)「談話レベルから見た“politeness”:“politeness theory”の普遍理論確立のために」『ことば』14号:20-29. 現代日本語研究会

宇佐美まゆみ(1994)「言語行動における“politeness”の日米比較:談話レベルにおける“politeness”の普遍理論確立への模索」『スピーチ・コミュニケーション教育』第7号:30-41. 日本コミュニケーション学会

宇佐美まゆみ(印刷中)「談話レベルから見た敬語使用:スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』第662号掲載予定. 昭和女子大学近代文化研究所

内田伸子(1993)「会話行動に見られる性差」『日本語学(世界の女性語・日本の女性語)』Vol. 12 明治書院

江原由美子・山崎敬一・好井裕明(1984)「性差別のエスノメソドロジー-対面的コミュニケーション状況における権力装置-」『現代社会学』第18巻. 143-176.

遠藤織枝(1994)「会議の中の応答詞」『職場における女性の話しことば』(東京女性財団1993年度助成研究報告書) 現代日本語研究会

小林美恵子(1993)「座談における話題の転換」『ことば』14号 現代日本語研究会

寿岳章子(1979)『日本語と女』岩波新書

=英語文献=

Brown, P. & Levinson, S. (1987) Politeness: Some universals in language usage. Cambridge University Press.

Coser, R. L. (1960) Laughter among colleagues. Psychiatry, 23, 81-95.

Fishman, P. M. (1978) The work women do. Social problems, 25, 397-406.

Foucault, M. (1972) Power/knowledge. New York: Pantheon Books.

Goffman, E. (1972) The nature of deference and demeanor. In Goffman, E. Interaction ritual: Essays on face-to-face behaviour. Penguin. 47-96.

Lakoff, R. (1975) Language and Women's place. Harper and Row, New York.

Nakane, C. (1970) Japanese society. Berkeley, CA: University of California Press.

Thorne, B. & Henley, N. (1975) Difference and dominance: An overview of language, gender and society. In Thorne, B. & Henley, N. (eds.) Language and sex: Difference and dominance. Newbury House, 5-42.

Todd, A. Dundas & Fisher, S. (1988) Theories of gender, theories of discourse. In Todd, A. Dundas & Fisher, S. (eds.) Gender and discourse: The power of talk. Norwood, NJ: Ablex. 1-18.

Zimmerman, D. & West, C. (1975) Sex roles, interruptions and silences in conversation. In Thorne, B. & Henley, N. (eds.) Language and sex: Difference and dominance. Newbury House, 105-129.

(昭和女子大学)

宇佐美まゆみ(1994)「性差か力(power)の差か: 初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より」『ことば』15、現代日本語研究会: 53-69. 17頁. 1994年12月.